
LOST WORLD

奈瑠華美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOST WORLD

【Nコード】

N1152L

【作者名】

奈瑠華美

【あらすじ】

科学と魔法が共存する世界。そんな世界に跳んでしまった男が友達を見つけ、元の世界を目指すファンタジー。超大作になるかは未定、笑

壊れゆく日常（1）（前書き）

初ファンタジー。

更新は遅いですが、どうか見てやって下さい。
お願いします。

壊れゆく日常(1)

最近、巷で噂になっている話がある。

町の裏にある山の中、そこで怪しい宗教の信者達が儀式を行っていると言う話だ。

都市伝説とでも言おうか。

この話には続きがある。

なんでも儀式を行うには人の屍が必要らしい。

この話と関係があるかどうかは分からないが、近頃失踪事件が増えている。

まったく、どうなるんだか。

彼はそんなことを考えながら朝食をとっていた。

テレビのニュースでは連日この事件を取り上げている。

ふと、画面の左上に目をやった彼はそれが示す時刻に焦っていた。

ヤバイ、遅刻だ！

急いで制服に袖を通した彼は親に挨拶もしないで玄関を飛び出していった。

彼の名前は柏木 貴哉。

少年とも青年とも言い切れない微妙な位置にいる高校生だ。

髪は茶色いが染めた訳ではなく、地毛の茶色だ。

おかげで他校のヤンキーに喧嘩を売られる事が多い。

「よお、貴哉！」

向こうから叫びながらやって来たのは水沢 遼。

俺の友達であり、喧嘩もこいつが連れて来る様なモノだ。

「今朝のニュース見たか？」

遼が俺に肩に手を回しながら尋ねてきた。

「ああ、見たよ、また行方不明だってな」

俺はその手を払いながら答えた。

「あの人俺の隣に済んでる人だぜ」

自慢げに話す遼だが俺は呆れながら返した。

「あのなあ、それってつまりお前も危ないって事だろ」

遼は今気がついた様だ。

あれだ、鳩が豆鉄砲を喰らうとこんな顔をするのだろうか？
まあ、関係ないが。

「確かにそうだな、でも大丈夫だろ俺達強いから」

そう、俺達は強い。

町のヤンキーどもでは相手にならず、県外からも来たほどだ。
その度に倒してきた。

勿論、他にも仲間はいたがその中でも群を抜いて二人は強かった。

「いざとなりゃ、戦うさ」

「だな」

俺達は頷き合々と学校へと向かった。

退屈な授業を受け、昼休みを馬鹿して過ごし、掃除をサボれば直ぐに下校だ。
校門からでると突然後ろから突進を喰らい、変な叫び声がでてしまった。

「おい、大丈夫か？」

「遼、てめえがやったんだろが」

俺は背中をさすりながら愚痴った。

あいつは手加減を知ったほうがいいな。うん。

一人で眩き一人で納得すると、遼は先に行ってしまった。

「あ、馬鹿！待て！」

俺が遼に追いつくと遼は鋭い目つきで前を見据えていた。

「どうした？」

俺は尋ねたが遼が答えを言う前に分かった。

前には明らかに怪しい黒いロングコートの男がいた。

その男はキョロキョロと辺りを見回し、また少し進んでは辺りを見回していた。

「怪しい、挙動不審だ」

奴は見えるが奴からは見えない位置まで移動すると、遼が耳打ちをして来た。

「連続失踪に関係してるのか？」

そこから少し相談し、奴の後をつけることにした。

奴が向かう先についていくと町の裏側に向かっていることが分かった。

俺は森の手前で遼に話しかけた。

「なあ、この森って……」

「ああ、あの都市伝説だろ？ 所詮伝説だ、それより後を追うぞ」

そういうと遼は森の中へ入って行った。

ああ、くそ！ 嫌な予感がする。

あいつは、もっと考えてから行けよ。

俺は少し毒づくとも森へと入って行った。

ここで人生が変わると思わずに。

壊れゆく日常（1）（後書き）

キャラがある程度揃ったら後書き劇場やろうかな。

前から宣言していた通り、ファンタジーを始めました。
不定期更新もいいところですが、よろしくお願いします。

壊れゆく日常(2)

木々がうつそうと生い茂っている。当然だ、貴哉は今森にいるのだから。

「おい！遼、待て！」

貴哉は枝や雑草を掻き分けながら進んでいった。しばらく進むと木の幹に隠れている遼を見つけた。遼は貴哉に気づくと身振りで隠れるように言ってきた。貴哉は屈んで身を低くすると、遼の所まで走って行った。

「お前はもつと考えてから……」

「静かに！」

貴哉の言葉は途中で遮られてしまった。

「あれ見ろ」

遼が指差す方向には一軒の家があった。一階建てでそれほど広くはない。

「あれがどうしたんだ？」

どう見たってただの家だ。ただ一点外壁中に何かの札が貼ってある事を除けば、たが。

「さっきの男がここに入って行ったんだ、それにあいつがドアを開

けた時、中からうめき声が聞こえた」

貴哉の嫌な予感は当たっていた。遼が何かを決めた目つきで俺を見ていたので、不安になって尋ねてみた。

「お前、どうするつもりだよ」

「中に入る」

即答だった。

遼は一度決めるとどこでも動かない。今まで遼が決めたことを辞めさせることは出来なかった。

「やっぱりそうなるか」

貴哉は今にも飛び出しそうな遼の肩を掴み、引きずり戻した。

「お前が行くなら俺も行く、ただあいつがまた外に出てからにしよう」

遼は貴哉の条件を渋々承諾すると近くの木にもたれ掛かった。家に入るチャンスは思った以上に早くやって来た。男が家から出て、見えなくなったのを確認すると貴哉と遼は家に入って行った。見渡した限りは普通の家だ。リビングとキッチンがあり、部屋は三つで近代的な様式だ。

貴哉達は順番に部屋を周り、最後の部屋へ向かった。最後の部屋は異様だった。部屋中にお札が貼っており、部屋の真ん中に地下へと続く階段があった。

「なんだこの部屋、気味がわりい」

遼は呟くと、階段に向かって歩きだした。階段を下ると周囲が一変した。ゴツゴツとした岩に囲まれた古代の遺跡のような場所だ。さらに進むと奥の方からうめき声が聞こえてきた。貴哉は本能的に危険を感じたが、あえてそれを無視し、声のする方へと向かった。進むにつれてうめき声は大きくなり、一人の声ではないことが分かった。

「おい遼、ヤバイ匂いしかない、ここは一旦戻ろう」

とうとう貴哉は本能に逆らえなくなり、逃げようとした。

「ここまで来て戻れるかよ、お前は戻れ、俺は行くぜ」

遼は貴哉の言葉には耳も貸さずに進んでいく。

「くそっ！あの馬鹿野郎が！」

貴哉は後を追うと、不思議な光が見えてきた。光に向かって行くと小さな広間にでた。その広間の真ん中に光があるのだ。光は今にも全て飲み込みそうな危険な感じがした。遼がふと周りを見渡し呟いた。

「なんだ……………これ……………」

釣られて見渡した貴哉は絶句した。岩壁に人が「打ち付けられて」いたのだ。両手両足を杭で打ち付けられ、血を流していた。

「ダメだヤバすぎる、遼！戻るぞ！」

「ああ、今回ばかりは同感だ」

来た道に戻ろうとしたちやうどその時、革靴が地を鳴らす音が聞こえてきた。その音は貴哉が最も恐れていた地獄だった。

「あいつが戻ってきた」

貴哉は焦って辺りを見渡した。運よく、光の奥に隠れる事が出来そうな割れ目を見つけた。そこになんとか隠れると同時に二人の男が広間に入ってきた。貴哉は耳と目に全神経を集中させ、二人の話を聞いた。

「導師様、異世界への扉は開きました」

貴哉達が追っていた男は何かの宗教の信者でもう一人がその導師ということだった。信者は頭を垂れたまま、導師に何かを呟いた。導師は銀のお盆を受け取り、壁に打ち付けられている人達へと向かった。

貴哉が壁の人達に目を向けた時光が揺らぎ、その顔を照らした。そこにある顔は全て見覚えのあるものだった。連日テレビのニュースで必ずと言っていいほど目にする連続失踪事件の被害者だった。貴哉は急激な吐き気に襲われ危うく声を出すところだった。口を押さえ、しばらくして落ち着いた頃に遼が聞いてきた。

「どうした？」

「あの壁の人達…失踪事件の被害者だ」

もう一度そちらに目をやると導師が壁の人達の血を銀の盆に集め

ていた。

「あいつら何してるんだ？」

遼が貴哉の肩越しに見ながら呟いた。導師は壁の人達を一人ずつまわり、その血を集めていた。

「あの様子じゃこっち側まで来そうだな」

貴哉達が隠れている場所の横には一番最近の被害者――遼の隣人がいたのだ。

「よし、あいつがあと二人こっちに来たら走って逃げるぞ」

あと二人、合計七人が壁にいて、二人過ぎれば四人目になる。

貴哉にはそれを待つ時間が無限にも思えた。導師が四人目に取り掛かった。

「今だ」

貴哉は小さく呟くと岩壁をすり抜けようとした。だが運悪く岩の突起に足をひっかけ転びそうになった。すかさず遼が少しだけ貴哉を支え、すぐに走り出した。貴哉も体勢を立て直し走り出した。しかし躓いた音が導師達に気づかれていた。貴哉達は必死に走った。極度の緊張と喧嘩の時以上の神経の昂ぶりを感じながら。

不意に背筋が冷えた。貴哉は後ろを振り向き絶句した。付き添いの男が拳銃を構えていたからだ。

――死んだ。貴哉はそう思った。拳銃から鉛玉が押し出され貴哉の足を抜け、遼の右ふくらはぎを穿った。遼が叫び声をあげ倒れていき、貴哉は遼にぶつかり倒れそうになった。

人というのはこけそうになった時、近くにあるものに捕まろうとするが、貴哉にとってそれが正しい判断だったのかはこの先ずっと分からなかった。分かっていた事は死ぬという事と向こうで二人が怒りと絶望に顔を歪ませている事だった。

貴哉は光に触れた、それがもたらす影響も知らずに。

そして世界は闇に包まれた――

一瞬が無限に感じられまた、無限が一瞬にも感じられた――

すべてが飲み込まれ、一部が吐き出された――

貴哉と遼は光に流れ、そして、落ちて行った――

壊れゆく日常(2) (後書き)

段落って意外とつけるの難しいんですね。

ようやくと異世界に行きそうな感じです。

よし！頑張って執筆だ！

……っと、その前に次回予告！

次回「少年の夢だった」(嘘) お楽しみくださいませ。

不思議な世界（1）（前書き）

待ってた人はお久しぶりです。

不思議な世界（1）

辺り一面が真っ白の中を落ちている。風が吹きすさび、もみくちゃにされる。

この感じ、スカイダイビングみたいだ。とにかく体勢を整えないと――。確か落ちる方を向いて、両手足を広げて、パラシュートないという意味がないじゃないか！ああクソ！そうだ遼は！？辺りを見回し左下に遼を見つけた。なんとか遼に近づき手を伸ばすがストレスで届かない。

「おい遼！起きろ！目え覚ませ！」

下には暗闇が口を広げ待っている。貴哉は何度も手を伸ばすが風に煽られ遼の手を掴むことができない。暗闇はいやがおうでも迫って来る。強風が吹き、さらに遼から離される。そこで貴哉は全てを諦めた。

昨日の晩飯何だったけっかな。いや、何を考えてるんだろうか俺は。もう死ぬのか。遼と一緒に悪くねえかな。

貴哉は手を伸ばすのを諦め、死を覚悟した。目をつむり、考えるのを止める。

貴哉と遼は暗闇に飲み込まれ互いの居場所さえ分からなくなった。そして、貴哉は気を失った。

「あのお、起きてくださーい」

「おい起きろ、風邪引くぞ」

「ほらどいて、こうすりゃ起きるわよ」

声が聞こえる。俺死んだんじゃないのか？それともここが天国なのか？

意識が戻り、目を開けようとした貴哉の顔に思いっきり水がかけられた。

「ぶはっ！なんだ!？」

驚いて飛び起きると目の前には見知らぬ三人組がいた。

「起きましたか」

「やっと起きたか」

「ほら起きた」

なんだか三種三様のリアクションをとっている。

「あんた達は？」

明らかに面識のある人物ではない。貴哉の問い掛けに背が低く、長い金髪の少女が答えた。

「あ、私ミナ・ルースって言います、よろしくお願いします」
この可愛らしい少女はミナと言うらしい。いかにも気が弱いという感じだ。

「あ、ああよろしく」

笑いかけてくるミナの頭を横から赤髪のポニーテールをした人が叩いた。

「ふにゆう、何するんですかあ」

「そんな気軽に自分の名前を明かすんじゃないわよ」

「まあまあ、武器も持っていないし、悪い奴じゃなさそうだからいいだろ。あ、ちなみに俺はリク・ハンね、でこっちの赤いポニーテールがカナリア・アシュバルト」

「リク！あんたまで！」

赤髪の気の強そうなのがカナリア、茶髪の大人な感じの人がリクか。

そう言えばなんで俺はこんな所にいるのだろうか？それよりもどうして生きてるんだ？確か光に吸い込まれて暗闇に落ちて、遼とは

ぐれて：そうだ！遼は！？

「あの！近くにもう一人背の高い金髪の男が倒れてなかったですか？」

リクが二人に目をやるがどちらも首を横に振っただけだった。

遼はどこに行ったんだ？それよりホントにここは何処？仕方ない、恥ずかしいけど聞くしかないか。

「そうですか、あと変な事を聞きますがここはどこなんですか？」

リクは一瞬怪訝な顔をしたが答えてくれた。

「ここはユニオン連邦の首都から南に二週間くらいの所だけど？」

ユニオン連邦？そんな国名無いぞ。こいつふざけてるのか？

よくみると他の二人も剣や杖を携えている。この人達、頭おかしいのかよ？

「そんな国名この世界には無いはずですよ」

今度はカナリアが前に出て来た。

「あんた頭大丈夫？ユニオンなんて幼稚園児でも知ってるわよ。」

やたら頭に来る言い方だが、なんとかスルーすると、リクが苦笑しながら話しはじめた。

「おいおいカナリア、言い過ぎだろ？」

会話から察するにどうやら俺はリクと話した方が良さそうだ。

「お前、ここに来る前に不思議な光を見なかったか？」

「ええ、見ましたけど？」

なんでこんな事を聞くんだ？変な人が変な事を聞いてくる。もうそれだけで逃げた方がいい気がする。

「やっぱりな、ええと簡単に言えばだな、ここはお前が住んでたのとは違う世界だ」

は？今こいつなんて言った？違う世界？どういうことだ？

「異世界人！？こいつが？」

横ではカナリアも驚いていた。ミナは……まぬけた顔をしている。分からない。俺が異世界人！？

「え、おい、どういうことだよ！？」

「そのまんまの意味だ。ここはお前が住んでたのとは違う世界って事さ。まれにお前みたいに跳んでくる奴がいる」

考えれば考える程分からなくなる。

ここが異世界？そんな事あるわけない……けど……あの男、異世界への扉がどうか言ってたな。もし本当にそうだとしたら？とんでもない事に巻き込まれた気がするな。

リクは貴哉の前まで来ると肩に手を置いた。

「まあ、いろいろ大変だろうからしばらく一緒にくるか？」

もしここが普通の世界だとしたら、彼等について行けば確実に変人扱いだ。だがもしここが彼の言う通り異世界だとしたら………ついで行った方が無難だろう。いざとなれば逃げればいい。

「分かりました、まだ信じたわけではないですがよろしくお願いします」

貴哉の言葉にリクは頷き、ミナはよろしくお願いしますと頭を下げた。唯一カナリアだけが不満げな顔をしている。

「こんな奴と一緒にいたら高額な依頼が受けられないじゃない！」

よく分からないがカナリアは俺が入るのには反対のようだ。

「そうは言ってもこんな所に一人で置いて行けないだろ？それに簡単な依頼なら受けるぞ」

カナリアはそれでも不満そうだったが、一応は納得した。

「分かったわよ、ただしこいつが一人で生きて行ける様になったら別行動よ！」

これではばらくはなんとかなるか。なんか嫌われてるけど。

「そうと決まればもっかい自己紹介だな。俺はリク・ハン、ギルドエターナルのリーダーだ。まあ詳しい事は道すがら話すとしてよろしく」

ギルド、また聞き慣れない単語だ。本当に異世界なのかもしれないな。

「あ、えとミナ・ルースです。えと、その、よろしくお願いします」
やっぱりこの子はオドオドしてる。それにロリっ子だ、うん。

「カナリア・アシュバルト、いい？ 足だけは引っ張るんじゃないわよ」

何かよく分からないが俺は嫌われてそうだ。

「柏木貴哉です、よろしくお願いします」

「もう仲間なんだから敬語なんて使うなよ」

貴哉はリクが笑いながら差し出した手をしっかりと握り返し、どこまで続くか分からない長い旅路へと旅立って行った。

不思議な世界（1）（後書き）

大変疲れました。

物語の大筋は決めてるのですが細かいところが難しい。

それではまたいつになるか分からない次話でお会いしましょう。

不思議な世界（2）（前書き）

僕、更新遅いですなあー

不思議な世界（2）

「この世界はまず魔法と魔物が存在している。魔法は魔力がないと使えないし、魔物は魔力と人間を栄養にする。魔物にあつたら気付かれる前に逃げろよ？武装してるならまだしも丸腰じゃまず敵わない、だから俺達みたいに武装してるんだ」

リクはどこから突然拳銃を取り出して見せてきた。

「次は国だな、大きな国はユニオン連邦とオーメル共和国がある。昔はラインアーク帝国もあったけどいろいろとあつたせいで今じゃ残党が残ってるだけだ。ユニオンは魔法が発達した国で幾つかの国の集合体みたいなもんだ。国の中でまたさらに幾つかの自治区に分かれている。オーメルは機械が発達している、銃やら電車やらはそこに跳んできた異世界人……ええと……お前の世界からの人間がもたらした技術なんだぜ。」

これには驚いた。俺以外にもこの世界にやって来る人間はいたらしい。そのことをリクに聞くと結構な数の人間がこの世界に来ていられるらしい。彼らはこの世界に適応して生きていられるらしい。この時点でもうすっかりここが異世界だということを認めていた。

「あとはギルドについてだな、ギルドはハンターと呼ばれる人達の集まりだ。ハンターは数人が集まってギルドを作り、それをどの国にも属さない中立のギルド連合が統括してる、稀にギルドに属さないハンターもいるがな。とにかくハンターはギルド連合が各地に設置している支部で依頼、クエストを受けてそれをこなし報酬を受け取る、そして俺達もギルドを作って働いてるって訳。ここまでは大丈夫か？」

話しは分かる。仮に作り話だとしても手が込みすぎてる。信じてしまった方が無難かもしれないな。

「大丈夫、着いていける。それで今どこに向かってるんだ？」

今は草原を歩いている。木々がポツンとあるだけで後はすべて草だ。

「しばらく行けば村が見えてくる。今日はそこで一泊するつもりだ」

リクが説明すると、すぐにカナリアが突っ掛かってきた。

「そんなことしてたらルーランまで一週間以上かかるじゃない！ただでさえクエストの期日ギリギリなのに！野宿でもしないと間に合わないわよ！」

リクは立ち止まるとカナリアを説得しはじめた。

「貴哉がいるんだ、野宿だといつ魔物に襲われるか分からないだろう？村に泊まれば少なくとも襲われる確率は減る」

どうやら俺のせいらしい。こういうのは向こうに悪気がなくても心が痛くなる。こっちは何も言えないし。

「はあ、分かったわよ」

どうやらカナリアが折れたようだ。最後に俺に一瞥をくれると離れた場所で歩きはじめ、リクは苦笑いしながら戻ってきた。

「あいつも根は悪い奴じゃないんだけどね。いろいろあって魔物を倒すのに命賭けてるから辛いんだ、分かってやってくれ」

リクは俺の肩を叩くと歩きはじめた。

「とにかく、大まかには話したし後は必要が出てきてからでいいだろ、面倒だし」

リクの話しが終わると入れ替わるようにミナが横に來た。遠くでは何かの叫び声が聞こえた気がした。しばらく歩いているがミナは何も話さない。

「……………」

「……………」

……………
「气まずい。」

「あの……………」

「は！はいい！」

「いや、そんなに驚かなくても……………別に取って食いはしないよ」

正直こっちが焦った。まさか話しかけるだけでこんなに驚くとは。

「何か話しがあって來たんじゃ……………？」

ミナは下を向いて話し掛けようかどうか迷っている様だ。しばらく待っていると恭しくこちらを向き問い掛けた。

「あの……む、向こうの世界ってどんな世界なんですか!？」

それだけ言うと再び下を向いてしまった。

「向こうの世界は、こんなに緑は無かったな……」

遠くから叫び声と唸り声が聞こえる。確かにはっきりと。

「この声……!!」

ミナの顔が青ざめていく。リクは声のする方角を見つめ、カナリアに先に行くように指示し、貴哉の方へ向かった。

「あの方角には今夜泊まるはずの村があるんだ、もしかすると魔物に襲われたのかもしれない。ミナは貴哉を頼む!俺はカナリアを追う!」

そう言ってリクはカナリアを追って走って行った。

「あの……どうしますか？」

ミナがやはりオロオロしながら尋ねてきた。

「取り合えず俺も行く!」

魔物とやらが気になるし、人が襲われてるなら助けないと。

貴哉はミナと共に村へと走った。しばらく走り、貴哉の視線に入ってきたのは瓦解した村の門だった。

「これは……!!」

reality(1)

「これは………!？」

そこにあつた家はほとんどが崩れ、よくても半壊だった。いつの間にか悲鳴は止み、異様な程の静寂が辺りを支配していた。

「これは…ひでえ」

呟く貴哉の横ミナは更に青ざめていた。

「あの…はやく…こっちに」

ミナは必死になって貴哉の腕を引っ張り、辛うじて残っている民家の影に隠れた。

「どうかしたのか？」

貴哉の問い掛けにミナは静かに通りを指差した。そこには真っ黒の熊に大きな鉤爪と尻尾を生やしたような生物がいた。

「あれが魔物です…」

ミナの消え入りそうな声に貴哉は生唾を飲み込んだ。気持ち悪い――見ただけで嘔吐感を覚え、思わず目を逸らした。

「なんなんだありゃ………!？」

再び魔物に目をやるとその先に小さな女の子が魔物に背を向け、

うずくまっていた。

「あの子……気付いてない!？」

魔物の栄養源は人間。確かリクがそんな事を言っていた。事実、辺りには人間の腕や足などが散乱していた。魔物は静かに少女へ近づいていく。その様子は獲物を狩る猛獣のようでもあった。

貴哉は少し深呼吸すると家の陰から飛び出し、少女へ向かって走り出した。魔物が爪を振り上げ少女へと襲い掛かる。すんでのところで貴哉が間に合い、魔物の爪は空を斬った。しかし、バランスを崩した貴哉は肩から地面へと倒れ込んだ。そこに追い撃ちをかけるように再び魔物が爪を振り上げた。

「クソがつ!!」

そのまま転がりなんとか回避するが背後には壁が迫っており、ついに追い詰められた。唯一の救いはまだ距離が開いている事だった。

大丈夫、距離はまだある。しっかりと見てれば避けられる。貴哉はそう考え、しっかりと魔物の爪に注意を向けた。すると突然魔物が体を横に向けた。次の瞬間貴哉の顔にねっとりとしたものがかかった。その血は抱えているはずの少女の首から噴き出していた。傍らに目をやると少女の首が目を見開いたまま転がっていた。

「う……うああああ!!」

貴哉は首の無い少女の体を放り投げると尻餅を着いた。結果的にそれで魔物の尻尾の二撃目を避けることが出来たのが不幸中の幸いだろう。しかし、そんな幸運が続く訳もなく、魔物は狩りを終えるため貴哉へと近付いて来た。爪が振り上げられ貴哉は目をつぶった。

「——っ！」

しかし、いつまで経っても衝撃はこない。ゆっくりと目を開けると、そこには魔物の爪を剣で受け止めるカナリアがいた。

「早く逃げなさい！邪魔なのよ！」

貴哉は起き上がろうとしたが、腰が抜けていて起き上がれなかった。

「フレア！」

カナリアが魔物を弾き返し叫んだ。するとカナリアの剣の切っ先に炎の玉が発生し、カナリアはそれを魔物に向けて打ち出すと自身も魔物へと向かって走り出した。炎弾を受けた魔物は怯み、そこへ更に剣で切り付けられ膝をついた。

「これで終わりよ！」

カナリアは魔物の脳天目掛け剣を振り下ろした。絶命した魔物は黒い霧となって消えて行き、それを確認したカナリアは剣を鞘に戻し、貴哉の下へと向かい怒鳴り付けた。

「あんた馬鹿じゃないの！リクの話聞いてた！？武器も持たないで魔物に立ち向かうなんて！だからあんたは邪魔なのよ！」

カナリアは貴哉を見下しながら言い放った。

「だからって…目の前に殺されそうな人がいるのにほっとけるかよ！」

貴哉も負けじと言い返すがその言葉は余計にカナリアを怒らせただけだった。

「あんたね！弱いくせにでしゃばるんじゃないわよ！あのままじゃあの子の後にあんたも死んでた！力もないのに誰かを守るなんて思い上がりもいいところよ！」

カナリアは踵を返すと歩いて行ってしまった。後に残された貴哉はカナリアの言葉を噛み締め、地面へと横たわった。

「何なんだよ……ここは」

呟いた貴哉をちょうどリクが覗き込んできた。

「よう、無事か？」

起き上がると心配そうな顔のミナもいた。

「カナリアに助けられたよ」

俯きながら言う貴哉に対してリクは苦笑いだった。

「その様子じゃ散々言われたんだろ？」

「もうここでやっていく自身がないよ」

貴哉は弱々しげに呟いた。

「ミナ、ちょっと貴哉を頼む」

リクはそう言うとかナリアが歩いて行った方へ向かった。

「俺、どうしたらいいんだろ……強かったら、あの子も守れたのかな」

俯いたままの貴哉の横にミナが腰を降ろした。

「あの……柏木君は強いと思いますよ……ミナなんて、あの時怖くて動けなかったから……」

ミナが慰めてくれているが今の貴哉にはあまり効果はなかった。

「動けても……動けても守れなかったら、意味ないさ」

「そんなことないです！……動かないよりはいいに決まっています……」

最後の方は自分に言い聞かせるかのようにミナは言った。

それから、日が暮れる頃にリクとかナリアが戻ってきた。貴哉は意を決してカナリアの所へと向かった。

「カナリア……昼間は俺が馬鹿だった」

貴哉はそう言って身構えた。

「……………そう思うんなら強くなりなさいよ」

もっと激しい言葉がくるだろうと予想していた貴哉はカナリアのその言葉に拍子抜けしてしまった。

当のカナリアはそれだけ言って寝入ってしまった。その姿に、貴哉は強くなる事を誓った。遼を見つけるためにも、元の世界に戻る

ためにも、そして、誰かを守るためにも――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1152/>

LOST WORLD

2010年10月28日06時08分発行